

● 八ヶ岳踊り大会

..... 253

茅ヶ崎歴史散歩

1 大岡祭..... 255

2 明治から続く梯子乗り..... 257

3 萩園村の大飢饉..... 258

4 円蔵の三つ角..... 261

5 茅ヶ崎の歌..... 263

6 大山街道と富士塚..... 265

7 鎌倉古道..... 267

8 東海道..... 269

茅ヶ崎の歌

1 茅ヶ崎甚句..... 271

2 茅ヶ崎柳島エンコロ節..... 280

3 茅ヶ崎南湖麦打唄..... 284

あとがき..... 286

神奈川県無形民俗文化財

七月十五日早暁、暁の祭典として知られる

茅ヶ崎海岸浜降祭



下町住吉神社  
文化5年 400kg



菅谷神社  
昭和53年 230kg



上町金刀比羅神社  
天保2年 420kg



中町八雲神社  
400kg



下赤神明大神  
大正2年 450kg



本村八坂神社  
明治22年 600kg



寒川神社  
昭和50年 200kg



鶴城八幡社  
文化3年 450kg





十間坂神明宮



第六天神社  
明治25年 500kg



堤八坂神社  
300kg



円蔵神明大神宮  
明治13年 450kg



南湖御霊神社  
昭和31年 150kg



中島日枝神社  
明治5年 450kg



萩園三島大神宮  
昭和25年 450kg



新町巖島神社  
大正8年 360kg



西久保日吉神社  
昭和51年 600kg



茶屋町大神宮  
昭和30年 80kg



甘沼八幡大神  
明治26年 450kg



柳島八幡宮  
昭和23年 550kg



今宿松尾大神  
昭和53年 300kg



矢畑本社宮  
昭和53年 450kg



高田熊野神社  
昭和52年 450kg



芹沢腰掛神社  
昭和10年 400kg



倉見神社  
昭和55年 350kg



室田八王子神社  
昭和53年 300kg



下町屋神明社  
明治42年 55kg



香川瀧訪神社  
昭和51年 450kg



小和田熊野神社  
昭和54年 600kg



中海岸神社  
昭和54年 150kg



妻沼八王子神社  
明治28年 600kg



上赤八雲神社  
明治27年 480kg





### 3 暁に祈る

茅ヶ崎市は神輿の街だ。

遠く建久（けんきゅう）の昔から、若者の肩から肩へ引継がれ、浜降（はまお）りし、禊（みそぎ）の神事が続けられてきたことは、実にすばらしい事だ。

七月十五日まだ明けやらぬ茅ヶ崎海岸。

各地神社の幟（のぼ）りをへんぼんと翻（ひ）る）がえして、次々と神輿（みこし）が到着する。  
朝露にぬれた漁船、大漁旗などが、朝モヤの中を突き進む神輿と、神秘的な対象を見せる。

〔サア〕茅ヶ崎名物、茅ヶ崎名物

左富士、上り下りの東海道

松の緑に吹く風は

昔も今も変らねど

富士の高根と男だて

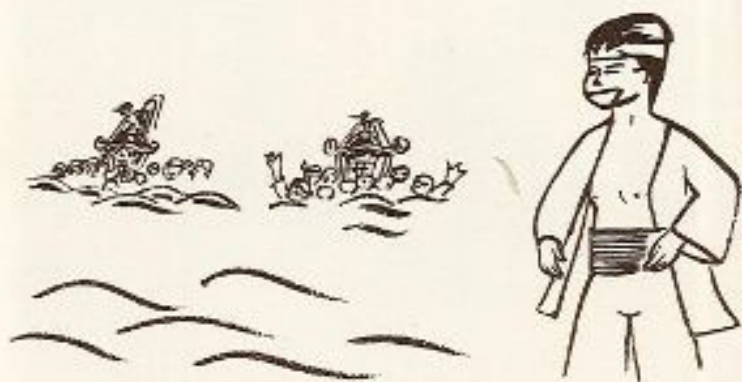
ドッコイ、ドッコイ

茅ヶ崎甚句の声もひときわ高く、浜に近い南湖下町の大神輿は海に突進する。

「下町の神輿は海水のタイミング、海の様子を知っている。漁師の先導で、潮の状況を見て入る。海が満潮の時は入りません。入ると端棒（はなぼう）の担ぎ手が足をとられ、後が海に入らないうちに、神輿が傾いて危険だから。」



おらが神輿の特徴について、尾坂芳彦さんは  
 「鶴嶺八幡社は、茅ヶ崎一古く、きめこまかくできています。長く保存するため修繕をした」と話す。  
 誰れも彼も、我が鎮守の神様の神輿は、可愛いくて恰好がいいのだ。



と三橋正さん。  
 近年では誠に残念だが、すべての神輿が海に入るわけではない。理由としては、帰路の足が重くなる。神輿の金具がさびるなど、である。  
 各地神社の神輿が続々集まってくる頃、東の空に大きな太陽がゆっくり昇ってくる。海はキラキラと輝き、神輿の金具がピカピカとまぶしい。  
 浜降り祭が、別名。晩の祭典。と言われるのは、このように朝早く行われ、晩に祈る勇壮な祭り。だからである。  
 神輿は人波をかき分けるようにして、浜辺を乱舞する。  
 十万余の大観衆は、おらが神輿の勇姿に酔い





本村八坂神社、  
 「屋根紋が違う。重さは茅ヶ崎で一、二でしよう。」  
 鈴木豊さんの話。  
 赤羽根神明大神、  
 「他の神輿と恰好が違う。屋根が高く、胴が長い。孔雀の尻尾がたっている。餓鬼の頃から、くっついていいるから、下赤の神輿には愛着がある。」  
 川辺勝雄さんの話。  
 円蔵神明大神宮、  
 「屋根紋がない。」  
 昔鶴嶺八幡さまの神輿には屋根紋がなかった。位がよくて紋をつけなかったので、八幡さまの分かれである円蔵の神輿は、今もつ



寒川神社  
 「菊の御紋が付いている」  
 菅谷神社  
 「江戸末期の神輿は、傷みがひどくなり、新調した。これまでよりひと回りほど大きいのが、飾りもそっくりにつくった。」  
 三沢誠さんの話。  
 南湖八雲神社、  
 「彫刻に力を入れてあるため、胴がずんどうに見える。安定感のあるいい神輿だ。」  
 青木道男さんの話。  
 南湖金刀比羅神社、  
 「屋根の造りに特徴がある。茅ヶ崎には一つしかないでしょう。」  
 増山正一さんの話。



し、昭和十二年にはじめて浜降祭に行った。その時は藤沢市の遠藤からも南湖の海岸まで神輿を担いで出していた。それが昨今、自動車で、西浜海岸まで持って行くなんて、寂しいもんだ。」

村越市郎さんの話。

新町殿島神社、

「昭和四十九年に浅草で修理した。金箔が塗ってある。今も海に入るので、勇壮な神輿としても有名である。」

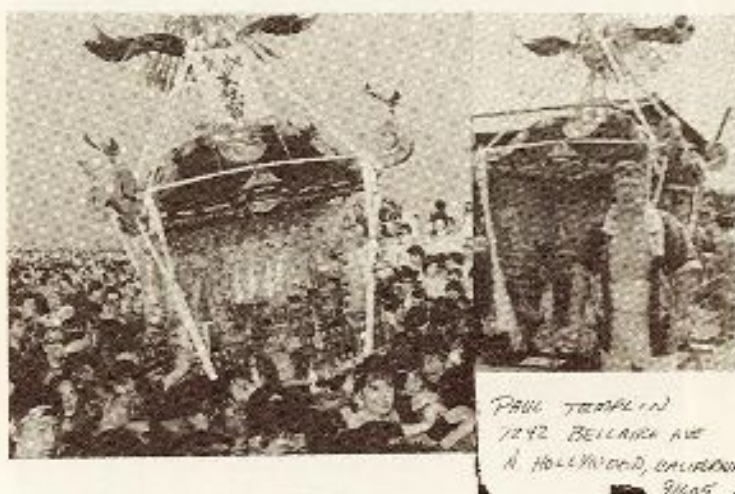
篠原貞一さんの話。

萩園三島大神、

「特徴は鳳凰（ほうおう）、輿に品がある」

角田雪夫さんの話。

柳島八幡宮、



て巴（ともえ）をつけない。屋根のそりがよい。」

円蔵山王社（神明大神）

「子供神輿、大正八年に私の父、嘉一が造りました。」

四方（しほう）唐破風（からはふ）、増組（ますくみ）は三手先のすばらしい神輿である。

大神輿も同じ造りで、明治十三年十月十五日に造った。」

吉野博さんの話。

堤八坂神社、

「白旗さんの飾り神輿を買った。元は菊の御紋がついていた。神輿は堤下が管理していたが、部落和合のため、堤上・堤下共同で修理





桜井明彦さんの話  
 十間坂神明神社  
 「子供の頃、神明さまの子供神輿は、他より大きいと自慢したものです。格好もいいしね」  
 坂巻満雄さんの話。  
 中島日枝神社、  
 「自分の部落の神輿ですから、大変気に入って担いでいます。つい先だって、修理の話が出ました時、年配者から  
 「これだけの立派な彫りものに、原形を維持したまま金泊が、うまくほどこせるものだろうか」  
 という声もありました。それほど彫りものもいい。今の金泊はピカッとしていますね。中



「神輿好きが大勢いた。肩を抜かないので、神輿を担ぐには、必至だった。」  
 第二次世界大戦で神輿が焼失し、今の神輿は戦後千葉で造った。  
 江戸型神輿のように担ぎ方の練習をしなくても、柳島は担ぎ方がうまい」  
 永野信行さんの話。  
 甘沼八幡大神。  
 「総体的により神輿である。神輿は金泊を塗らずに白木のままでです。」  
 沼上伊次郎さんの話。  
 十間坂第六天神社、  
 「彫りものが美しい、彫刻のよさは、浜降祭の神輿の中でも一、二でしょう」



島のはしぶみのある金泊です。担ぎ方は、昔から時々走る事が伝統になっています。

土地の神輿はかわいいですね」

高崎泰三さんの話。

御霊神社、

「中型の神輿、小さいわりに大神輿並にできている」

加藤繁一さんの話。

茶屋町大神宮、

「茶屋町には神輿がなく、山車があった。七月十四日は浜降祭の宵宮で、夜どおし若衆が山車を引っぱった。

山車の上には、芸者が乗っていて、芸者がタikoを打ったり、芸をするので、大変な賑わいであった。



国道が砂利からアスファルトへ——山車を引っぱる時代ではなくなったので、山車を横須賀に売って、子供神輿を造った」

重田英弘さんの話。

西久保日吉神社、

「昭和五十年までは、鶴嶺八幡社の神輿と一緒に担いでいた。若手の音頭で自分たちの神輿を持つとうという事になった。

重さ六百キロ、茅ヶ崎一重い神輿と言われている」

芹沢腰掛神社

「大山の宮大工が造った。形が非常にいい。

神輿らしき、神輿である。」

相田賀寿広さんの話。

高田熊野神社、





だが、お神輿を業者に造ってもらおうと、何千万円からの大金が必要。それでは自分の仕事を生かし、お神輿を造ろうと思立ち、あちこちのお神輿を写真にとったり、床の間に置ける程の大きさの模型を造って自信を得て、大きなお神輿造りにとりかかった。

初めの頃は失敗を恐れ、何を造っているのか、家人にも言わなかった。仕事の合間や休日を利用し、徹夜を何日もして、念願のお神輿がようやく一年目で完成。このお神輿は、重さ四百五十キロで本格的な大人用神輿である。

「いいかげんなものは、造りたくない。お神輿は自分よりも長く生きるのだから、恥かし



「金泊の彫りものはきらいです。『茅ヶ崎流にしてほしい』という事で造った」

高田日枝神社、

「最高にいいですね。特に彫りものがいい、孔雀が大きいし、江戸型でなく、本当の茅ヶ崎流です」

久保田芳弘さんの話。

香川諏訪神社

「浜降祭の一基に加わろうと、寝食も忘れお神輿を造った。その人は大工の亀井茂さん（香川九七三）。

亀井さんは、小さい時からお祭りとお神輿が大好きですが、香川にはお神輿が無く、いつも他地区に担ぎに行って、肩身の狭い思をした。いつでも誰れでも担げるお神輿がほしい。





「昭和の初期、小島伊勢松さんが造った。けやきの白木で立派なもの。昭和十年頃から、お賽銭で除々に鈴をつけたり、金泊を塗ったりして修理されている」  
内藤興さんの話。  
上赤八雲神社  
「距離が遠くて、南湖の海岸まで持ちきれないので、最近では浜降祭に行かない。  
この頃では、神輿を修理して、再び浜降祭に行こうという声がある」  
小沢佐吉さんの話。  
菱沼八王子神社、  
「昔は浜降祭に行ったが、何しろ重い、海に行くのがやっとなかった。そこで菱沼だけ、地元の菱沼海岸で七月二十五日（みそぎ）を



くないものを造りたい。そのためには、完成するまで、仕事を休んで浜降祭を目指し、精魂を込めて造りました」と亀井さん。また、お神輿を造ったことによって、茅ヶ崎ばかりでなく、市外にも多くの友人が出来たと、今まで友人もいなかった地域の孤独な少年が、お神輿を通じて友人が出来、性格が明るくなったと少年の母親からも、感謝されている。亀井さんは、「お神輿を担ぐ人は、常識を持って担いでもらいたい。お祭りには、けんかや酒の飲み過ぎ等はつきものだと思うている人がいるが、恥かしいことである。こういうことは無くして、茅ヶ崎の祭りは安心して見られるようにしたい」と。  
下町屋神明社、





すさまじいまでのエネルギーをぶっつけている。昔も今も、浜降祭は生活の一部であって農作業の区切り（サラリーマンは明日のエネルギー）、そして湘南の夏は本格的な暑さを迎える。

各家々では、赤飯をたいて、祭典を祝う。

昭和五十三年、新しい大神輿が四基も誕生し、第二期の浜降祭黄金時代を迎えた。

矢畑本社、今宿松尾大神、室田八王子神社、岡田管谷神社の四社だ。

さて、この祭典風土記などによると、①今からおよそ八百年の昔（建久年間）鶴嶺八幡社の八丁（はっちょう）松並木（指定文化財）南側が海で、そこで源家の戦勝祈願など



していた。

鍛代石屋 → 電極 → 旭が丘 → 菱沼海岸が、神輿道で、早朝四時出興、神主の御祝（おはらい）などがあつた。昭和四十年頃、交通事情の悪化等で、今はこれも中止されている」

水島さんの話。

矢畑本社宮

「鶴嶺八幡社の神輿をモデルに浅草で造つた。孔雀が大きいのが特徴」

室田八王子神社、今宿松尾神社、

「ともに村を上げて神輿を完成させた。三百キロ程度の手ごろな神輿」

茅ヶ崎の街は、住民上げて神輿に対して、





期を避けるため、鶴嶺も南湖も寒川も一同に  
会し、合同祭典を南湖の浜で実施した。（事  
実山口太郎吉氏＝安政生まれ＝は式典に参加  
された）  
この伝統ある祭典が、一時交通規制などで、  
路上の渡御は禁じられて、担ぎ手が減少した  
事があった。  
しかしこの時、神輿野郎が愛好会を作った。  
昭和五十年、奥鬼会（こしきかい）が誕生し、  
茅ヶ崎としては、珍しい集団として、脚光を  
あびた。  
アイディアは小池照義（香川一三四一）さん  
であった。  
小池さんは鳶職で、神輿が大好き、おやしき  
んゆずりなのだ。このグループにはかわいら



のため、鶴嶺八幡社神輿（浜之郷、下町屋、  
四蔵、西久保、矢畑、南郷、茅ヶ崎七村の鎮  
守）を出興（しゅっこう）させ渡（みそぎ）  
をした。  
② さらにその後、南湖神輿による渡（みそ  
ぎ）  
③ 江戸末期の国府祭（こうのまち）の還幸  
途中（かんこうとちゅう）相模川に流された  
寒川神輿の標着説。寒川神社の神輿は茅ヶ崎  
海岸ではなく、国府祭に出興していたが、そ  
の事件後、茅ヶ崎の浜へも渡御するようにな  
り、神輿を拾い上げた恩人南湖の孫七のお礼  
まいりをする。

① ③ これらの浜降り行事を、山口太郎  
吉氏の話によれば、明治九年七月十五日農繁





から会社や学校に十分まにあう。

ニッポン放送「朝はおまかせアンコーです」で、最近浜降祭の現場が中継され、国道一三四号を職場に急ぐサラリーマンの車の窓から、明るく歯ぎれのよいアンコーさんの声がひびいてきた。

今やニッポン放送の齊藤安弘さん（高田三八——）の知名度は高い。

（東村山一丁目——。ドリフターズの志村けんのように、齊藤安弘さんは、我が街茅ヶ崎のかくれた名誉市民なのだ。

浜降祭は毎年、NHKや各民放テレビでもニュース等でとり上げている。神輿野郎には、「おらが神輿がNHKテレビに写った。」などと自慢話となっているが、早朝だけに、



しい女の子も会員になっていた。

○奥鬼会（小池義男）○朋興会（ほうよかい  
 ||新倉邦雄）○か組（亀井茂）○浜降睦（三橋正）○祭心連（さいしんれん—山田猛）○南湖睦（石黒喜代志）○若草睦（わかくさむつみ—島崎隆行）○剣童会（けんりゅうかい—市川邦夫）○神田会（吉野英雄）○相神会○菊水会。

この他愛好会は続々誕生する気運である。

祭典の早朝、茅ヶ崎の浜辺は出勤前のサラリーマンなどで埋めつくされるが、浜降祭合同祭典がはじまる頃になると、職場に急ぐ人達も、そろそろと会場を去って行く。

。暁（あかつき）の祭典であるから、それ



これを取材するカメラマンは大変であろう。  
とにかく浜降祭は、昔も今も、若者の手か  
ら手へ、大うけにうけている。  
ドッコイグドッコイ。

◆ 現存神輿ベスト10 ◆

- 1位 鶴嶺八幡社（文化3年）
- 2位 下町住吉神社（文化5年）
- 3位 上町金刀比羅神社（天保2年）
- 4位 中島日枝神社（明治5年）
- 5位 円藏神明大神宮（明治13年）
- 6位 本村八坂神社（明治22年）
- 7位 十間坂第六天神社（明治25年）
- 8位 甘沼八幡大神（明治26年）
- 9位 上赤八雲神社（明治27年）
- 10位 菱沼八王子神社（明治28年）

#### 4 浜降祭の歴史

禊祭から浜降祭へ（一一九一年建久二年）今から千年も昔の話。海は東海道のあたりまで、ひたひたと打ち寄せていたといわれる。そして、八丁松並木といわれる景色の美しい鶴嶺八幡社の参道先で「禊祭」が祖先の手によって、おごそかに行われていた。

鶴嶺八幡社では、毎年六月二十九日になると神輿を海辺に担いで運び、海の水を溶びて、体についている罪やけがれを洗いながし、まっすぐな心と健康な体で生活ができるように祈った。

「南無八幡大菩薩」「佐塚大明神」の信仰は、茅ヶ崎に多くの氏子や信者を集め、鎌倉時代、江戸時代の昔から郷土の信仰の中心であった。

素直な心になることが、どんなに大切か、またどんなに困難なことか、（人間は本来まっすぐな心や、清らかな自然な心を持つているもの）祖先は考えた。むずかしい話で、ヤキモキするよりも「祭り」をすることによって、「神」に近づき、ほんとうの人間の生き方を教えてもらった。





。禊の心は、祖先の心、私達の心のふるさと「祭り」の行事にしっかりと伝えられている。

したがって、茅ヶ崎の明治生まれの人達は、今でも浜降祭のことを、

「禊（みそぎ）に行く」

「禊まつり」

「神輿を担ぐ」……

というように、昔の言葉を使っている。

現在行われている「浜降祭」は、合同祭。

ともいわれ、鶴嶺八幡社が遠い昔から行

っている。「禊まつり」から見ると、新しい

もので、「浜降祭」という新しい言葉

にかえられているということになる。

#### 南湖の神輿と重田八郎左衛門（一七〇

二年＝元禄十五年）古来、南湖の漁業が盛んなころ、鶴嶺八幡社の浜降祭は、神輿が南湖の浜へ渡御する時、漁家の肩にかわり、海岸を練りまわった。

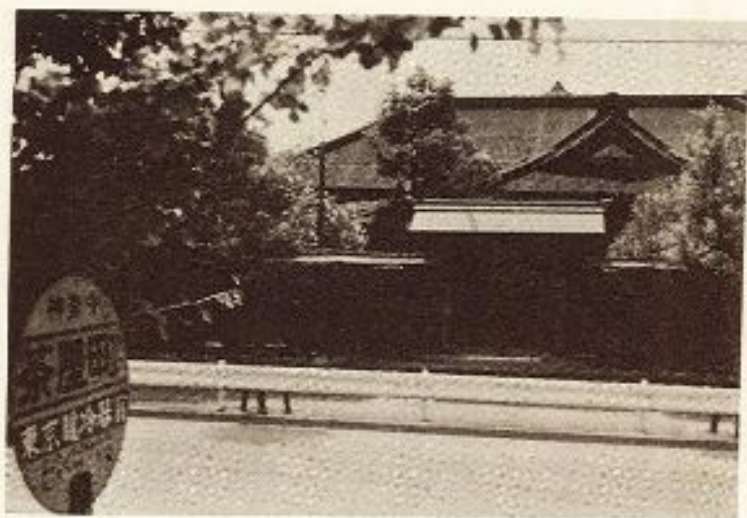
禊（みそぎ）のあと、帰途につく時は、鳥井戸あたりから、宮本の若者がかわって宮入りしたのであるが、元禄十五年（一七〇二年）、南湖浜側の若者が肩の強いのを自慢して、神輿を宮本へ渡さず、ついに夜になっても、よく日になっても渡さず、宮入りができないので、世話人に交渉したが渡さない。

そこで江戸家、重田八郎左衛門が仲裁に入り、とにかく宮本へ詫びをいれ、その

証しとして、鶴嶺八幡宮の前庭の低い石垣や、石段を奉納することとして、一応和解し、宮入りがようやくできた。

一方南湖の浜側では、一社でも神輿をつくり若者に担がせたい一念で、江戸家重田家の屋敷神を、天王山に祀って、八雲神社とした。

それより中町に八雲神社の神輿ができ、次に上町金刀比羅神社、下町住吉神社の神輿ができて、南湖の浜側では、それより鶴嶺八幡社の神輿をかつぐことはなくなった。江戸家の仲裁により和解ができ、神輿ができたことのお礼として、浜降祭の午後、南湖三社（上町、中町、下町）は、神輿をかついで重田家（江戸家）へ



あいさつに行く習わしとなっていた。現在では、五穀豊穰（ここくほうじょう）大漁祈願（たいりょうきがん）無病息災（むびょうそくさい）を祈る、御幣参りという式典のみ行われている。

寒川神社の神輿と鈴木孫七（二八三八年）

南湖の天王山南側に住む網元（あみもと）鈴木孫七（すずきまごしち）家は代々、天孫（てんまご）とよばれる。同家は、寒川神社の御旅所（おたびしょ）神主を勤め、祭礼の都度（つど）、寒川神社から使者を立て、準備ばんたんを依頼する。献饌（けんせん）、盛砂（もりすな）、注連張り（しめはり）など、古くは風折

烏帽子（えぼし）、素襖（すおう）、近年まで麻（あさ）上下を着用し、刀をさして最初に玉串（たまぐし）を奉てんした。

それらは御旅所神主として、当然のつとめであるが、同家と寒川神社のあいだには、すばらしい口づたえが残っている。

天保九年（一八三八年）、国府祭（こののまち）から還幸（かんこう）途中の寒川神輿が、平塚馬入川の渡し場に到着し、まさに渡船に乘ろうとした時、平塚八幡宮の神輿を担ぐ馬入の者の乱暴にあつて、神輿は川に落ち、おりからの梅雨に増水した激流は神輿を、はるか相模灘まで押し流してしまった。

その乱暴の原因は明らかでないが、馬入の者が、平塚八幡宮の神輿を担ぐのは当然であり、また平塚八幡宮神輿は、寒川神輿をこの渡し場まで、見送る習わしだったと言われている。

乱暴者十六人は、打ち首の刑を受けたが、実際は江川太郎左衛門の温情により、ちよんまげを切り落とされただけで事ずみとなった。

そのかみは平塚馬入の蓮光寺（平塚八幡宮の供僧）にほうむられ、ちよんまげ塚となっている。

さて、神輿流失という不祥事に、寒川神社では茅ヶ崎海岸の村々に三百石の報償付きで捜査を依頼した。





明治九年合同で行う事とし、合同祭典の儀式が行なわれた。

それ以降この祭典を、浜下（はまおり）の神事である事から、浜降祭（はまおりさい）と決め、七月十五日とした。

ここに広域的な祭典は、スタートしたのである。

明治十四年は快晴に恵まれ、八社の神輿が参加した。そこで神輿渡御（みこしとぎよ）に際して、順序を決めなければならぬ。

寒川神社は国幣中社（こくへいちゅうしや）で、菊の御紋をつけて権威をもってゐる。鶴嶺八幡は、寒川神輿の露払いをするという単純な取り決めであった。



数日後、南湖の海で、地曳網を曳いていた鈴木孫七は、海中に沈む神輿を発見した。ひき揚げて、家の後方、石尊山に奉置し一宮に急報した。

三日後、神輿は寒川神社にもどった。

口づたえによると、寒川神社神輿の茅ヶ崎海岸渡御は、この神輿拾得の縁で、孫七の漁場へお礼まいりするのだと言ふ。

孫七家は御旅所神主を許された。

浜降祭合同祭典の時代へ（一八七六年）

鶴嶺八幡社の禊祭と寒川神社神輿のお礼まいりが、茅ヶ崎の浜を舞台に、長い間別々に行なわれてきた。

明治の時代を迎え、農繁期をさけるため



祭典が七月十五日に定着すると、広域的

に氏子を持つ鶴嶺八幡社では、神輿ひと

つでは、いろいろともめ事が多い。

なにしろ浜之郷、下町屋、円蔵、西久保、

矢畑、松尾、南湖、それに茅ヶ崎七村の

鎮守の神さまなのだから。

そこでまず円蔵あたりが、鶴嶺八幡社の

神輿を独占したい事で、とりあいのケン

カをした。

明治十三年円蔵は鶴嶺から分かれ神輿を

新調して、浜降祭に参加した。

その時の配列は、(山口太郎吉氏談)

1 鶴嶺

2 寒川

3 南湖

4 中島

5 円蔵の五基

いまにも降りだしそうな南湖の空であった。式典はほとんどなく海に入る禊の神事と勇壮な神輿ぶりを見せたという。

円蔵が神輿をつくった。本村、十間坂なども鶴嶺八幡社離れをし、独立。

現在の矢畑神輿まで、つぎつぎと鶴嶺八幡社から分離し、浜降祭の神輿は増える一方だが、元は鶴嶺八幡社の神輿を信仰していた。

昭和五十四年神輿列位

●、鶴嶺八幡社大一

二、本社宮 大一

浜之郷

矢畑







- |          |      |      |                  |      |       |
|----------|------|------|------------------|------|-------|
| 三、日吉神社   | 大一小一 | 西久保  | 十八、八坂神社          | 大一   | 堤     |
| 四、巖島神社   | 大一   | 新町   | 十九、八雲神社          | 大一   | 藤沢・用田 |
| 五、中海岸神社  | 大一小一 | 中海岸  | 二十、熊野神社          | 大一   | 高田    |
| 六、柳島八幡宮  | 大一小一 | 柳島   | 二十一、日枝神社         | 大一   | 中島    |
| 七、八幡大神   | 大一   | 甘沼   | 二十二、八坂神社         | 大一   | 本村    |
| 八、諏訪神社   | 大一小一 | 香川   | 二十三、神明大神         | 大一   | 下赤羽根  |
| 九、第六天神社  | 大一   | 十間坂  | 二十四、神明大神         | 大一小一 | 円蔵    |
| 十、神明宮    | 大一   | 十間坂  | 二十五、熊野神社         | 大一   | 小和田   |
| 十一、八王子神社 | 大一   | 室田   | 二十六、松尾大神         | 大一   | 今宿    |
| 十二、八王子神社 | 大一   | 菱沼   | 二十七、御霊神社         | 大一   | 鳥井戸   |
| 十三、三島大神  | 大一   | 萩園   | 二十八、金刀比羅神社       | 大一小一 | 上町    |
| 十四、八雲大神  | 大一   | 上赤羽根 | 二十九、八雲神社         | 大一小一 | 中町    |
| ● 寒川神社   | 大一   | 宮山   | 三十、茶屋町大神宮        | 大一   | 茶屋町   |
| 十六、菅谷神社  | 大一   | 岡田   | 三十一、住吉神社         | 大一小一 | 下町    |
| 十七、腰掛神社  | 大一   | 芹沢   | ○三十一社三十九基①31基②8基 |      |       |



5 大小まじえて50基目 —昭和54年—

茅ヶ崎市内外大小五十基目の神輿は、小和田熊野神社で、吉野久紡さん達松和会の神輿好きが、その熱意で造りあげた。

「茅ヶ崎の四分の一の面積をもちながら、組織がない。何んとか神輿を中心にして、部落のまとまりを見い出したい。」

というのが、作成の弁である。

神輿を造るにあたり、菅谷神社などの神輿を参考にした。神輿を造った人は宇都宮の都所清一さん（七十六歳）で、茅ヶ崎形の神輿は初めてだそうだが「おやじが須賀なので、是非江戸形でない、古い茅ヶ崎神輿を造りたい。」と良心的に、仕事をしてくれたと小和田松和会の人達は喜こんでいる。







## 6 神奈川県無形民俗文化財

浜降祭は、茅ヶ崎市と寒川町全体の祭典である。

七月十四日宵宮は、各地神社では、神官によって、地元の氏神様を神輿に移す式が行なわれる。

これを神霊移し（みたまうつし）という。

ゆえに茅ヶ崎の浜降祭による神輿の役割りは、地元の氏神様を、茅ヶ崎海岸まで移動させる時の乗りものである。

ドッコイ//ドッコイ//

の掛け声で神輿をもむ。神輿を振れば、振



るほど、神様は喜ぶとされているが、時代の移り変わりは、人間の心を変えてきた。神霊（みたま）が入っていない江戸三社祭などの町内神輿のまねをして、神輿に乗る馬鹿ものがある。

神聖な神輿を大切にしたい。

また氏神様（神輿）が30基以上も集まる海の祭典は、この茅ヶ崎が全国で唯一とつである。その神輿の数に対して、神奈川県は、無形民俗文化財に指定した。

テレビで大受け 20万人の大観衆を集めた昭和54年の日曜日の浜降祭は、テレビ朝日「あばれはっちゃく」で、NHK TVはカメラレポートで放映され大受けだった。



◇浜降祭渡御の見所◇  
 昔の浜降祭のムードを味わいたい人は、十五日午前三時鶴嶺八幡社横大門に行ってみるとよい。本社宮、日吉神社、鶴嶺八幡、それと遠路はるばる寒川神社など五、六基の神輿がまだ明けやらぬ世界に、勇壯な神輿ぶりを見せ、チヨウチンの光と松並木がなんとも神秘的である。



## 7 部落まわり

茅ヶ崎海岸へ渡御した各地神社の神輿は、そこで得られた海の幸を各家々に持ち帰り（還幸かんこう）、それをふりまく、称して、部落まわり、家内安全、無病息災、どの家にも祈願して、神輿は練る。

神輿が休憩するところは、何か所か決まっています、そこで神輿に対して、各家々からお礼のお供えが行なわれる。

それはお賽銭、お酒、お菓子などの類である。それは宮入りとなる夕方まで続く。大人神輿は、もうすっかり酔って、村の氏神様はちどり足となっている。

コミュニケーションにかけている現在、浜降祭の果す役割は大きい。

さあ君も、心の健康を、とりもどすためネクタイをはずして、おらが鎮守の神輿を担ごう。

ドッコイ！！ ドッコイ！！



## 8 明日はネーゾ、ドッコイ、ドッコイ

長い梅雨をふっ飛ばす、豪快な浜降祭

古い時代から、茅ヶ崎の夏は浜降祭によって、その季節の到来を感じさせられてきた。各地神社の神輿道には、注連縄（しめなわ）が張りめぐらされ、遠く近く笛や太鼓の祭ばやしが開いてくる。

各地神社では、宵宮の十四日には、神官によって、厳そかに御霊（みたま）移しの式典が行なわれ、神社境内には提灯がともされ、浴衣がけの男女が夜風に涼みながら、遅くまで語り合う。神輿野郎は一睡もしないで、甚句を歌ったりして、十五日を迎える。

これらは、古い時代には、茅ヶ崎市や寒川町をはじめ、遠く用田や遠藤までが圏内で、浜降祭一色に塗りつぶされていた。七月十五日は、会社、銀行、官庁、学校などは休日とされ、その後十四日と十六日は、短縮時間となっていたので、祭りムードは最高の盛りあがりを見せていた。

然し、この素朴な浜降祭も年々あり方が変わってきた。

高度経済成長の時代に入ると、様相は一変し、昭和四十年前後から交通事情の悪化等で厳しい規制がひかれ、道路の神輿渡御（みこしとぎよ）は、昭和四十五年から禁止され、西浜まで車で輸送することとされ、西浜から南湖海岸だけが、若者の手によって、担がれ練り歩く寂しいものとなった。鶴嶺八幡社近くの国道一号線に二十数基の神輿が一堂に会し、海岸まで渡御していた行事もとりやめとなった。

それまでの神輿の出興（しゅっこう―お立ち）は早く、外はまだ闇につつまれている早晩、神輿の台輪（だいわ）の鏝（かん）が、ドサツドサツと鳴る音が遠く聞こえて来ると、神輿野郎は、頭に血がのぼって、武者ぶるいをしたものであった。私もその部類で興奮したものである。子供達は母親に「神輿のお立ちだ」と起こされ、ねむい目をこすりながら、急いでワラジをはいて神輿のあとを追ったものである。各地の神輿道はもう大変な人垣で、若きも老いも押すな押すな盛況であった。

南湖海岸には、各地の神社の轆（のぼり）がへんぼんとひるがえり、船とおでんとほおずきの店が立ち並んで、女の子はほおずきを見ると「買って」とせがむ光景が見られた。浜降祭が終ると、女の子の間ではほおずき遊びが暫く続いた。ほおずきは中の種を出すのが、むずかしく、みんな途中で破れてしまう。急がずにゆっくりと手でもむと綺麗な

出る。種を上手にとつて、ほおずきに作り上げるまでが楽しみで口にいれると妙な匂いと苦さがある。女の子は口に含んで、ピーッ、ピーッと言を立てたりしていた。

ほおずきの店は、今は細々と続けられているが、ほおずきを買う人たちは、ほおずきそのものを買うのでなくて、浜降祭の気分や幼いときの追憶や郷愁を求めているのであろう。

かくて、交通規制等のため、年々縮小されていた浜降祭であったが、昭和五十一年をピークとして、悪条件を克服して見事復活した。

昭和51年は27基の神輿と10万人の人出で、盛大な晩の祭典「浜降祭」が再現した。神輿を愛する人、茅ヶ崎市民の熱意が、交通規制の流れを大分変え緩やかにした。

昭和51年には、テストケースとして、鶴嶺八幡社、寒川神社など六社が、二時間近くもかけて南湖海岸まで渡御するようになった。

浜降祭の歴史は古い、鶴嶺八幡社などの横（みそぎ）祭、そして寒川神社の神輿標着説、南湖の禊祭など――。古代から行われてきたものを、後に（明治九年）毎年七月十五日に、海の豊漁、山の豊作（お礼参り）などを祈願して、浜降祭の神事と定め、各地神社の合同祭典として、現在まで続けられてきた。

さて、式典から還幸した各地の神輿は、神幸を各町内に還幸して人々の幸を祈り、やがて宮入りとなる。この時は、すでに辺りは闇の夜となり、堤灯に照らされた神輿が、「明日は、ネーゾエ」ドッコイ、ドッコイ、「明日はネーゾエ」と勇ましい掛け声でもむ、光りと闇の対比の中で練る神輿の神秘。（今では警察からの規制があり五時まで。）

宮入りをすませると、いつまでもいつまでも耳の奥に、ドッコイ／＼ドッコイのなつかしい余韻がこちよい疲労感と共に、残るのである。

浜降祭（七月十五日早晚、茅ヶ崎海岸）

昭和三十六年七月四日 県無形民俗資料に指定

昭和五十二年二月九日 県選択無形民俗文化財に指定

昭和五十三年六月二十三日 県無形民俗文化財に指定



## 茅ヶ崎の昔話



### 9 栄光の浜降祭

昭和55年8月15日から三日間東京・渋谷区の神宮外苑・絵画館広場で、「第十回日本の祭り」が行われた。

主催は日本の祭り実行委員会。後援は自治省・文化庁など。青森ねぶた祭り・秋田の竿灯とともに、茅ヶ崎海岸浜降祭は郷土の栄誉をかけて熱演した。

司会の坂本九ちゃんが「浜降祭の神輿は、ドッコイ、ドッコイ」という独特のかけ声です。会場の皆様も一緒に掛け声をかけて下さい」とアナウンスすると、会場は割れんばかりの大声援となった。

菅谷・第六天・十間坂神明宮・諏訪・倉見と五つの神社の神輿は、広い会場の晴れ舞台に、すっかり興奮していた。

この日の模様はフジテレビで全国放映された。

## 茅ヶ崎の昔話



### 9 栄光の浜降祭

昭和55年8月15日から三日間東京・渋谷区の神宮外苑・絵画館広場で「第十回日本の祭り」が行なわれた。

主催は日本の祭り実行委員会。後援は自治省・文化庁など。青森ねぶた祭り・秋田の竿灯とともに、茅ヶ崎海岸浜降祭は郷土の栄誉をかけて熱演した。

司会の坂本九ちゃんが「浜降祭の神輿は、ドッコイ、ドッコイ」という独特のかけ声です。会場の皆様も一緒に掛け声をかけて下さい」とアナウンスすると、会場は割れんばかりの大声援となった。

菅谷・第六天・十間坂神明宮・諏訪・倉見と五つの神社の神輿は、広い会場の暗れ舞台に、すっかり興奮していた。

この日の模様はフジテレビで全国放映された。